
マルチ・メディアと新しい公共圏の可能性 —デカルトのボン・サンスの視点—

Multi-Media and Possibility of New Public Sphere —Perspective of Descartes's “bon sens” —

阿部孝太郎*

Summary

近年、マルチ・メディアの可能性が喧伝されているが、日本ではその経済的側面ばかりがとりあげられている観がなくもない。もちろん、それはそれで重要なことであるが、私自身は、マルチ・メディアの「可能性の中心」を、新たな公共圏の形成という観点——これは経済システムに関しても重要なテーマであるのだが——から考えている。

マルチ・メディアに関しては、一般的な定義がまだ存在していないかもしれない。さしあたって、西垣通の『マルチ・メディア』の定義をここで引こう。つまり、<音・映像・文書などの諸形式の情報をデジタル技術(コンピューター)によって統合したメディア>のことである。これによれば、従来のパソコン通信というものは、文字情報しかないので、マルチ・メディアの範疇には入らないが、WWW(World Wide Web)、あるいはCD-ROMのようなものは、ユーザーが音や映像を享受できるからマルチ・メディアと呼んでよいだろう。ただし、ビデオ・テープのようなものは、それだけではあえて「マルチ・メディア」と呼ぶ根拠が薄い。これがデジタル化されて、様々な加工・編集・交信の可能性がでてきて、マルチ・メディアとあえて定義づける根拠が生まれる。

また、「公共圏」ということだが、近代市民社会の確立期に果たしたコーヒー・ハウスやサロンの役割は見逃せない。そこでは、しばしば芸術作品をめぐる討論が行われ、個々人の立場を離れた公的な意見(世論)が形成されていった。本稿では、ハーバーマスの議論を参考にしながら、上記のマルチ・メディアとの関わり合いを論じていくことにする。

そして、近代市民社会の成立というマクロな歴史の経緯と、今日における電子コミュニティの発展という現象を比較しながら、中長期的な情報社会のヴィジョンを探っていきたい。

1 デカルトの残した問題

デカルト(1596-1650)といえば、ポスト・モダンという言葉が巷にあふれる今日では、近代思想の創始者の一人として悪の親玉のように扱われることが多い。確かに、デカルトが近代的な思考の元型を用意したのは事実かもしれないが、しかし、同時にたんなる「近代思想の親玉としては片づけられないものをその出発点から含んでいたように思われる。それが本稿でとりあげるボン・サンスの問題である。

さて、その前にデカルトが近代思想の確立者であるというのはどういうことであるか、以下の文脈に沿う形で簡単に振り返っておこう。

デカルトの生きていた時代、それは、まだ<神>(聖なるもの)を中心とした共同体を基盤とした社会であった。そこでは、多くの人々の意識は共同体全体(もしくは、王・首長)の意識と一致し、今日的な意味での自意識というものをほとんど持たずに生活を送っていた。たとえば、『アンシャン・レジームとフランス革命』においてトクヴィル(1805-1859)は次のように述べている。「われわれの父たちは、今日われわれが鑄造して用いるようになった個人主義という語を持たなかった。なぜなら、当時は集団に所属しないような、また自分を絶対に独りであるとみなすような個人は、実際存在しなかったからである。これに反して、フランス革命を構成している無数の集団は、ただ自分たちのことだけを考えていた。こう表現してよければ、それは一種の集団の個人主義であって、これが今日の個人主義に魂を準備したのである。」⁽¹⁾

つまり、われわれが自明のごとく考えている自意識を持つ個人など、せいぜい200年ほど前から西欧社会で一般化していったにすぎない。そして、その基礎を用意したのが言わずもがなデカルトの「コギト・エルゴ・サム」(我思う、故に我在り)という考えである。デカルトは、ここで共同体や人々が信仰する神ではなく、個人の意識から問題を出発させ、それがいわゆる近代

的自我の思想につながっているというわけだ。

また、彼は、<延長>という概念から、後のニュートン物理学につながる均質な空間(近代科学を可能にした)を想定したが、これはすべての土地やものに精神が宿るというアニミズム的思想を一掃し、固有の土地に縛られた伝統的な共同体の存立基盤も同時に解体していく運命となった。

<無限の空間が私を畏怖させる>。これは、パスカルの有名な台詞であるが、<神>という存在を欠いた、均質でのっぺらぼうの空間に生きることの恐怖として捉えることができる。

さて、ここからが問題である。かつての伝統的な共同体から離れ、独立した個人として出発した近代人は、実は、これ以後大変な難問を抱えてしまう。それは、共同体から離れた、全く独立した意識を持つ個人はいかにして他の人間と共通の意識・世界を共有するかという問題である(いわゆるホップズ問題)。それなくしては、おそらく人間は他者とコミュニケーションし、社会を運営することが不可能になるであろう。

ここで、デカルトはボン・サンス(bon sens)という概念でこれを説明している。つまり、すべての人間は生まれながらにして、他者とコミュニケーションする能力や、正しくものごとを判断する力を等しく持っていると言う。ところで、この bon sens というフランス語は、一般に良識と訳されているが、本来直訳すれば「良い感覚」(good sense)というべきものである。つまり、「あの人はセンスがいい」とか「〇〇君には非凡な野球センスがある」と言うときの「センス」という言葉を思い浮かべる方が的確ではないだろうか。実際、ゲーテンベルク・プロジェクトでなされている『方法序説』の英訳は次のようになっている。

Good sense is, of all things among men, the most equally distributed; the power of judging alright and of distinguishing truth from error, which is properly what is called good sense or reason, is by nature equal in all men⁽²⁾(良い感覚は、人間のすべての性質の中で、最も公平に分

配されている。それは、正しく判断し、誤りと真実を区別する力である。そして、適切にも良い感覚とか理性とか呼ばれているものは、生まれつきすべての人間に備わっているものなのだ(拙訳)

このように、「理性」だけでなく、その根底にある「感性」を重視した思想家としてデカルトを捉え直してみると、単純に近代思想の生みの親として安易に糾弾することはできなくなる。このような視点からデカルトを再解釈したのは、おそらく小林秀雄が最初である。たとえば、彼は「常識について」と題する講演で次のように述べている。「良識とか善識とかいう言葉があります。フランス語のボン・サンスの訳語だが、これは、ごく新しいもので、おそらく昭和に入ってからの新語でしょう。いずれにしても、日本語として、まだ熟してはいないし、これからも熟しそうもない。常識という言葉があれば、事は足りるからです。コンモン・センスに見合うフランス語は、サン・コマンだが、ボン・サンスの意味あいは、これとはっきり区別することはむつかしいようです。」⁽³⁾

そしてさらに、小林は、通常言われているような、近代的自我の生みの親としてのデカルト像を根本的に覆している。「コギトは、合理的に世界を再建するために、デカルトの頭脳から生まれた概念ではない。彼は、『コギト』という、これ以上純粋な、直接的な、疑いのような経験はない、そういう経験から出発したと言うだけなのです」。⁽⁴⁾

小林によれば、デカルトが書物を捨てて、「世間という大きな書物」にこれからは学ぶのだと決意したとき、そこにあるのは近代的な実験室の<知>ではなく、「世間」という体験からしか得られないような、感性的なものを基礎にした知性のあり方をむしろ想定していたはずである。彼の「近代思想の生みの親」としての地位は、後の哲学者たちがそう位置づけたにすぎないのであって、デカルト自身は近代の持つ問題性に関してむしろ疑義を唱えていた。筆者自身は、小林ほどポジティブな解釈をしな(詳細は後

述)が、このデカルトの再解釈は傾聴に値する。

日本で、コモン・センス(共通感覚)論を積極的に展開している中村雄二郎は、小林秀雄のこうした見解になぜか触れていないが、小林流の解釈ではデカルトの主張はコモン・センス＝共通感覚までつながる。⁽⁵⁾

共通感覚とは、五感を統合する総合的な感性能力であり、人間を人間たらしめている根源的な力のことである。通常、純粹に形式論理的だと思われる自然科学や数学にも根底にはこのような共通感覚が働いていると思われる。たとえば、黄金分割とギリシャ彫刻、フィボナッチ数列とオウム貝、ピタゴラスの指摘した音楽と数学の密接な関係を考えると、ポアンカレのいう「数学者の美的感受性」なるものも納得がいく。⁽⁶⁾

2 ボン・サンスと公共領域の形成

このようなデカルト解釈は哲学史的に見て妥当ではないと異を唱える専門家も一部にいてもいい。しかし、われわれの問題をこのように、bon sens=good sense =common sense と捉えることによって、これから先の共同性の問題がずいぶんと検討しやすくなる。

独立した自我を持った個人がそれぞれの価値観や思考を抱き、伝統的な共同体の拘束から解放され自由に生きていく。いわゆる「近代人」の誕生である。しかし、お互いが、ばらばらの考えを持っているだけでは社会は成立し得ない。そこで、公共的な意見の形成の場が必要となる。

教養ある市民は、芸術作品のような美的な問題をめぐってコーヒー・ハウスやサロンで討論を交わし、公的な見解(世論)を形成していく。前節で述べた観点から言えば、これは美的なセンスというものを通じて異なる他者同士が合意を形成していく過程である。「今日のように詩が、あるいは文学全般が作者の個室、書斎において構想され、やがて活字化されて発表をみるという、ある意味ではきわめて孤独な作業である時

代とは異なり、一七世紀においては詩作、劇作は公的な色彩をまだ色濃く持っていた」のだ。⁽⁷⁾

当時活躍した批評家・ジョンソンと「一般読者」の関係について、われわれのテーマに大きく関わる重要な著作である『批評の機能』において、イーグルトンは次のように述べている。「彼の試みが一般読者に受け入れられた理由の一端は、彼の名高い『常識』(Common Sense)にある。アディソンやスティーラーと同じように彼もまた、文学批評行為を自律的な美学の領域に閉じ込めないで、『一般イデオロギー』と有機的に結びつける。つまり、批評を、一般人の価値判断の様式や経験から切り離さず、専門的学問分化に先立ちそれを取りかこむ《生活世界》(Lebenswelt)にしっかり結びつけるのだ。」⁽⁸⁾

ここで言う「常識」(Common Sense)こそ、本稿が扱っているボン・サンスに他ならない。それは、日常生活で用いられている諸感覚に密接に結びついており、フッサールが指摘したように、実は近代科学をも根底で支えているものである。

一方、フランスでは、18世紀頃から都市の貴族を中心に文筆家、芸術家、科学者などが集まり、国王が宮廷で祝宴を開く形態とは異なる、サロンというものを形成していく。ハーバーマスは『公共性の構造転換』で、サロンに関してイギリスのコーヒー・ハウスと比較しながら次のように述べている。「市民階級は、国家や教会の指導的地位からはほとんど閉め出されながらも、経済においてはすべての枢要の地位を占め、他方、貴族階級は前者の物質的優位性に対する不満を勅許の特権と社交におけることさら厳格なヒエラルヒーによって補償していたが、その間にサロンでは、貴族とこれに同化された銀行と官界の大ブルジョワジーが、『知識階級』といわば対等の立場で立っていた。(中略)貴族出にせよ市民出にせよ、社交界の貴婦人のサロンでは、侯爵や伯爵の息子たちが、時計工や小売人の息子たちと交際している。サロンの中では、知性はもはや庇護者への奉仕ではなくなり、『意見』は経済的従属関係の拘束から解放される」。⁽⁸⁾

要するに、イギリスのコーヒー・ハウスや、フランスのサロンでは、お互いの世俗的な身分を離れて、文芸作品などの美的な問題を中心に、様々な討論を行う場が育っていた。このようにして、コーヒー・ハウスやサロンは、文化的な社交にとどまらない、実に大きな社会的影響を与えていった。イギリスのコーヒー・ハウスは、近代市民社会を用意したと言っても過言ではない。たとえば、そこで様々な政治的パンフレットが配布され、近代的ジャーナリズムの原型を生み、議論が行われて、民主主義の基礎を形成する。あるいは、そこで、様々な商業上の取り引きが行われ、近代的資本主義の制度を整えていく。ロンドンのコーヒー・ハウスから、有名な保険会社、ロイズが生まれたのは、あまりにも有名な話である。

しかし、独立した個人がお互いの美的センスの交換でもって公的領域を形成していたのは意外に短い期間にすぎない。18世紀において、すでに古典的公共圏は、商業主義へ転落していく過程にあった。レズリー・スティーブンは『クリティカル・レビュー』を念頭におきながら「それはまさに『新たな査問委員会、文学上の星室庁』の誕生であり、コーヒー・ハウスにたむろした文学知識階級の個人的言説が、あらゆる新刊書を書評するという、やや魅力に乏しい仕事に精を出す職業評論家の言説に、徐々に道を譲ったのだ」と述べている。⁽⁹⁾

そして、20世紀に入ると、再び公共圏を取り戻そうという『スクルーティニー』運動がリーブス夫妻らによって興される。リーブスは、十八世紀の「常識」(Common Sense)という語には「ふつうわれわれがこの語から連想するよりもはるかに重みのある意味」がこめられていたのではないかと指摘する。しかし、リーブスの「常識」に対する態度にはアンビバレンスな態度が見られる。リーブスはジョンソンを批判し、批評はたんなる「センスのよさ」の問題ではないと言い、「『一般読者』のとどこかぬところにある分析様式と、専門家だけが得られる文学体験の

形式、この二つがどうしても必要である」と述べ、現代の公共性を担う立場にあるのは大学において他にないと主張するに至る。イーグルトンによれば、ここにおいて、文芸批評という行為は、非専門家の手の届かないところ、換言するなら、公共圏を形成する一般的な議論の場から隔離された場に行ってしまったのである。¹¹¹

あるいは、また、ハーバースが指摘するように、マス・メディアの発達や普通選挙法の普及や市民の営利的組織への依存的傾向の強まりなどによる、いわゆる「大衆社会」の進展と共に、市民の意見を統合するような公共的な場も衰退していく。

自律した個人と美的な教養の蜜月期——一般に近代主義者が称揚する「近代」はこれを指している——を便宜的にここでは近代社会の「古き良き近代」(Old Good Modern)と名付けよう。それに対して、「人間解放」という本来の理念を均質化・効率化が圧倒してしまった、その後の近代社会を「行き過ぎた近代」(Excessive Modern)と呼ぼう。

デカルトのところで触れたように、もともと「近代」には二面性が含まれているが、結局のところ「自由・平等・博愛」といった理念よりは、産業社会を背景にした、均質化・効率化の方が中心原理なのではあるまいか。今や、ボン・サンスというものは社会の背後に押しやられ、人々は形式合理性をのみ叩き込まれている。そして、これが「近代」というものの根底にあった姿なのではないだろうか。¹¹²

3 近代の生んだ鬼子——専門人とテクノ・ナルシス

そのような意味での近代化が最も進んだ国が、この日本であるという判断にさほど異論はあるまい。たとえば、イギリスにおいては、官僚やビジネスマンとして成功するためには文学の教養が必須だと言われているし、アメリカでも、有力なビジネス・スクールへの進学には、自由

学芸(Liberal Arts)カレッジでの良い成績は非常に有利となる。このように、欧米社会が独立した個人を基盤とする「古き良き近代」の近代社会像にこだわっている間に、この国は均質な優等生人種を中心とする強固な産業文明を築き上げてしまった。(大量生産・大量消費を効率よく運営するには、独立した独自性を持った個人はむしろ阻害要因となる場合が多い。)

しかし、「行き過ぎた近代」は近年にいたって思わぬ——いや、本稿から言えば全く必然的なのだが——非効率を生じつつある。それは、ボン・サンス=good sense を軽視し、「受験戦争」に典型的なように形式的な合理性をあまりに重視したために本来の効率化の要請に沿わない奇形児を生んでいるという問題である。

筆者は、数年前の論文で、このままの社会状態が続けば、受験戦争の勝者の多くが、常識(コモン・センス)を持たない「専門人」に、敗者はルサンチマンを抱きながらメディアの作り出す自閉的な環境に退行するテクノ・ナルシスになるであろうことを指摘・予測した。¹¹³ 当時は、宮崎勤による「少女連続殺人事件」などがあり、後者が世間の注目を集めていたが、ここ数年、高学歴者の奇妙な事件が相次いで起こり、前者の問題が社会的に顕在化しつつある。¹¹⁴ そして、95年に入り、オウム真理教による地下鉄サリン事件などをきっかけに、世人に前者の問題が知られるようになってきている。

<大衆>としての専門人については、オルテガ・イガセットによる定義が有名である。

オルテガは『大衆の反逆』において、大衆を「みずからを、特別な理由によって——よいとも悪いとも——評価しようともせず、《自分がみんなと同じ》だと感じることに、いっこうに苦痛を覚えず、他人と自分が同一であることにかえっていい気持ちになる、そのような人々全部である」と定義している。¹¹⁵

そして、オルテガは「今日、社会的力を行使している者」として技師、医師、金融家、教師などの専門職をあげている。ところが、専門人

を一般大衆を支配するエリートとして例示しているのではなく、実は専門人こそが大衆の典型であると彼はいうのである。なかでも「最高の位置を占めて最も純粋な形でかれらを代表する者」として科学者を指名している。「物理学や生物学においてやらなければならないことの大部分は、だれにでも、あるいはほとんどの人にできる機械的な頭脳労働である。科学の無数の研究目的のためには、これを小さな分野に分けて、その一つに閉じこもり、他の分野のことは知らないでよかろう。(中略)

このような専門家こそ、私がいろいろな角度から定義しようとしてきた新しい奇妙な人間のみごとな例である」。¹⁹⁶

ところで、日本では自分の専門知識以外のことには疎い人を指す「専門馬鹿」という言葉がある。それは上の現象の一端を確かに示しているが、しかし、それだけでは充分ではない。筆者は、ボン・サンスを欠いたエリートの総称——すでにオルテガが上記の著作ですでに部分的に探り当てているが——として、この専門人を捉えている。¹⁹⁷近代の効率化・均質化を担う人物としての技術官僚＝テクノクラートは、近代社会の発展に大きく貢献したことは否定できない。しかし、ボン・サンスを軽視し、極端に形式合理性を重視したときにその病理的状态が現れる。

現代における典型的な専門職として、学者・官僚・医師・弁護士などが考えられるが、このままいけば、日本では近い将来、彼らの奇妙な犯罪がますます増加する危険性がある。おそらく、それは現在の「歪んだ平等教育」(＝いわゆる偏差値教育)が原因であり、子供たちの発達において、ボン・サンス(=good sense, common sense)を身につける機会があまりに少ないことに起因している。¹⁹⁸

また、テクノ・ナルシスも、やはりボン・サンスの欠如という点で専門人と共通している。ただ、彼らの場合、受験戦争の上層部に生き残ることができず、しばしばルサンチマンを抱い

て、アニメやコンピューターの世界に逃避している点が大きな違いであるが。

彼らは、たいてい形式論理の操作は得意だが、美的なセンスや常識に欠け、しばしば幼稚である。そして、美的なセンスということでは、服装や髪型など自分の見かけに注意を払わないことが多い。

彼らの多くは、いわゆるロリコン・アニメを好むが、これは形式論理で割り切れない、実際の異性関係を忌避する傾向から生じていると推測される。彼らは、卓上モニターの閉ざされた空間で、少女たちを陵辱し、現実には、ほとんどあり得ない女性に対する支配関係を享受している。筆者は、こうした傾向を「自閉的マッチョイズム」と名付けている。¹⁹⁹女性の社会進出が進み、女性が男性と対等の人間関係を望む一方、二次元世界の従順な美少女を好む者が増えてくる可能性はかなり高い。

テクノ・ナルシス(オタク族)に実際に接することの多い中島梓は、彼らの生態を細かく観察した著作、『コミュニケーション不全症候群』において、彼らの本質について、的確にも次のように述べている。「機械はなにもかも自分の意のままに反応してくれるし、自分を受け入れてくれる。また機械の論理はきっぱりと割りきれて必ず正解があるが、人間関係にはそれがない。これらのおタク青年たちはその『正解のない』状態、『理屈では割りきれない』状態に耐えられないのである、という。要するにそれがおタクの精神構造であり、それがおタク、というマスコミによって妙にコミカルにゆがめられてしまった転換期の新しい人間の真の不気味な姿なのである。」²⁰⁰

現在、オタク(テクノ・ナルシス)の典型例と言われる宮崎勤の事件で、彼の精神鑑定において分裂症か否かが問題になっているが²⁰¹、テクノ・ナルシスとは、近代の論理(＝ボン・サンスの否定、形式論理の重視)を誰よりも肯定しているという意味で「究極の近代人」であるといえる。その点で、彼らはわれわれが「現実」とみ

なしている世界から抜け出しているわけではなく、いわゆる分裂症の患者——彼らも共通感覚が欠如しているといわれる²²⁹——とは異なる可能性が高い。再び、中島梓の著作から引用すれば、「おタクと分裂症患者との違いは、分裂症患者は現実の世界に背をむけて、自分の内的世界につくりあげた個人的幻想の規範に『適応』した存在であるのにたいして、おタクは一応現実の規範には適応しており、ただそれはほんとうの適応ではなくて、二重の適応、実際にはない『自分の場所』を、虚構の、形而上世界の中においてそれを自我の根拠としたうえでの現実への適応である」のだ。²³⁰

4 マルチ・メディアの可能性——ボン・サンスの復活

しかし、一方で、イーグルトンが述べたような専門家とそれ以外の人たちという対立は、パソコン通信やインターネット等の普及により、消失する傾向に向かってきている。

たとえば、現在、大学は、徐々に情報を一般市民に公開化しつつある。アメリカの大学は、カリフォルニア大学・バークレー校などをはじめ、図書館のデータベースを無料で公開しているところがある。また、本稿でもデカルトの著作に関して利用したが、著作権の切れた、歴史上の有名な書物を電子化しようとしている大学もある。

さらに、現在起こりつつある様々な現象に関して、インターネットは、強力な情報提供ツールになっている。たとえば、電子商取引や遠隔医療の問題に関して、多少の操作知識があれば、まだ書物として出版されていない、多くの情報をインターネット上で入手することができる。このことは、それまでの専門家とそれ以外の人たちにあった、情報のヒエラルキーをかなりの程度崩壊させてしまう。消費者問題に関して権威ある教授が、コンピューターの扱いに不慣れなばかりに、初学者の学生に、PL法に関する

海外の最新動向を教えてもらうなどということが充分あり得る。

また、芸術の分野でも、ここ数年で、マルチ・メディアを利用した、インタラクティブな作品が多く現われ、それまで近代的な芸術の概念が受け継いできた、孤高の表現者という特権的な地位は揺らぎつつある。たとえば、現在の有力なマルチ・メディア作品(CD-ROM)の一つを制作した、音楽家ピーター・ガブリエルは、その良さについて「双方向性」(interactivity)があることをあげ、これまで受け身に終わっていたリスナーが積極的に作品の形成に参加できる点を賛美している。²³¹あるいは、最近、DJという、自分で演奏しない、過去の音楽の編集作業による表現が、主に若者たちの間で注目を集めているが、このような現象も、まさに上で述べた一つの典型的な例である。これらは、作品の質という点では、まだ発展途上にあるかもしれないが、将来的に、近代的な芸術のあり方を変え、社会から隔離された表現活動を、再び人々の生活に呼び戻す可能性を秘めている。

そして、経済活動の面においても、再びボン・サンスの働きが要請されるようになってきている。

真面目さ・忍耐力・効率が主として要求される生産中心の産業社会とは異なり、情報本位の経済、あるいは消費社会では、むしろ、モノを作る段階から購買に至るまで、ある種の遊び心や美的なセンスが重要になってくる。むしろ、人々が全員不真面目になってよいわけではないが、早い段階から産業構造を生産中心から情報中心のそれへと変化させているアメリカでは、経済システムの鍵になっている人物の多くは、そのような遊び心を備えたシンボリック・アナリスト(ロバート・ライシュ)たちである。²³²

また、筆者は、ライシュの提起する問題をさらに文明的なシステムの変容という点からまとめ、<近代>の効率化・均質化の論理を推進したテクノクラートに対して、美的・遊戯精神を備えた脱産業化社会のリーダーをセミオクラート

と名付けている。前者のテクノクラートは、形式合理性の面で特に優れた人物であるが、後者のセミオクラートとは、共通感覚に優れ、既存の情報を統合し、新しい<意味>を作り出していく人物である。²⁶⁾

そして、マルチ・メディアが普及した社会では、いよいよその傾向を強めていくだろう。現在、日本では深刻な不況が長びき、そのことが見えにくくなっているが、日本でも近い将来アメリカ同様に、遊戯的ともいえる感性的な職業が経済システムの中心に位置することであろう。(そうでなくては、おそらく世界経済の一線から外れていく。)

マクルーハン流に言えば、グーテンベルクの発明以降の近代人は、それ以前の人間に比べ、並外れて合理性に重きを置いていたわけだが、マルチ・メディアの登場によって、人間本来の、五感全体を重視するあり方に変化してきていると捉えることができる。

おわりに

近代社会は、もともと人間の様々な能力を解放していく側面と、社会全体を均質化してしまうという相反する側面を持っていたが、前者が中心になっていた時期は意外に短く、徐々に後者の側面が圧倒しつつあった。われわれは、それらを近代の「古き良き近代」と「行き過ぎた近代」と呼んだ。

しかし、均質化・効率化を推進した形で現れた消費社会、及びマルチ・メディアに代表される情報本位の社会では、「古き良き近代」にあり得た美的なセンスをもとにした集団が再び公共領域を形成していく可能性があることを概観した。

その際重要になってくるのが、芸術家や学者と市民との関係ではないか。イーグルトン流に、芸術家と市民を結ぶ「批評家」と言ってもよい。

芸術家というと「反社会的存在」、学者というと「世間知らずな」とか「世事に疎い」という

イメージが日本では強いが、本来、多くの社会では(近代西欧のみならず)ある種の公共性を持った存在である。そのようなイメージの流布は、近代市民社会の自律的形成を経ずに産業社会を達成した、この日本での特殊な事情によるところが大きい。

たとえば、古代中国の官僚とは、ウェーバーの説明などを持ち出すまでもなく、現在の(効率化・均質化という役割を担った)テクノクラートとしての近代的官僚とは異なり、文人的教養と品格を備えた貴族的知識人であった。ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』であげている例によれば、「対句法を用いて詩を即興で作ることは、極東世界の全域にわたって、ほとんど不可欠なタレントだった」のであり、アンナン外交ではそうした詩の創作能力が重要な役割を担ったのである。²⁷⁾

芸術家や学者はいかに孤独に密室に閉じこもろうとも、前者は美的なセンスでもって、後者は論理的な記号の構築によって、基盤となる世界観、社会のあるべき姿、人生のヴィジョンなどを示すことができる。

そして、マルチ・メディア社会は、前節で説明したように、それまで特権的だった芸術や学問への一般市民のアクセスを容易にし、誰もが芸術や学問に触れ、それらについて議論し得る社会である。²⁸⁾

現在進展しつつある、パソコン通信やインターネット上の、美的集団(美をめぐるの討論の場を共有)、知的集団(知をめぐるの討論の場を共有)は、そうした市民参加を具体化する可能性を持っている。そして、それは以前の古き良き近代を支えたコーヒー・ハウスやサロンと違い、物理的空間に制約されない、世界中の多くの人々に開かれた集団である。

補遺

日本においては、コーヒー・ハウスの研究が西欧におけるほど注目されておらず、今一つイ

メージが掴みづらい点があるかもしれないので、本文とは別にコーヒー・ハウスの社会的機能について簡単に補足しておきたい。

英国における17世紀半ばから18世紀前半にかけてのコーヒー・ハウスとは、今日の喫茶店とは大きく社会的役割が異なり、簡単に言えば、近代の諸制度の重要なインフラストラクチャーであった。コーヒー・ハウスから、民主的な政治制度が生まれ、近代的な資本主義が発展し、マスコミの原型がつくられた。そこでは、政治、経済、文学(これらは、当時切り離されて存在するものではなかった)の最新情報があふれて、人々は情報を求めて、そこに集まったのである。

コーヒー・ハウスと市民的公共性との関係を指摘した重要な著作として、本文でも言及した、ハーバーマスの『公共性の構造転換』があるが、コーヒー・ハウスが初版では「喫茶店」と訳されたり、クラブの社会的機能との相違—クラブは、言うまでもなくクローズドな集団である—をハーバーマス自身明確に分けていないなどして、日本の読者には、コーヒー・ハウスと言ってもきちんと把握しづらかった。

また、アカデミックな著作ではないが、ワード・ラインゴールドの『ヴァーチャル・コミュニティ』も、何度かコーヒー・ハウスと、今日の電子コミュニティが類似していることを指摘している。しかし、今のところ、それらは比喩的な言及に過ぎず、社会科学的な比較がなされているわけではない。筆者の「電子コミュニティとコーヒー・ハウス、茶会との比較研究」(第13回情報通信学会発表)は、コーヒー・ハウスと電子コミュニティとを比較し、前者は主に、後の物質文明につながる東洋の文物への憧れが根底にあり、後者は60年代のヒッピーなどとも関係する脱物質文明への志向が根底に存在するということを指摘した。そして、コーヒー・ハウスから生まれた近代的諸制度を、電子コミュニティは、改編し、新しい制度—たとえば、情報民主主義、電子マネー等の新しい経済システムなど—を作り上げるか

もしれない状況にあることを述べた。今後、上記の発表は論文として改訂され公表される予定であるので、詳しくはそちらを参照されたい。本稿は、それらの哲学的、思想的基礎の探求を試みた論考である。

(注)

- (1) 三浦雅士『主体の変容』(中央公論社)1982年 15-16頁
- (2) The Project Gutenberg Etext of A Discourse on Method(created by Ilana and Greg Newby)
グーテンベルグ・プロジェクトとは、主に著作権の切れた、歴史上の有名な著作を電子化しようというものである。一般に、学生のボランティアによって進められており、使用者は寄付を求められる。インターネット上で、このプロジェクトで収録された著作を入手することができる。
- (3) 小林秀雄『常識について』(角川書店)1968年 273頁
- (4) 小林秀雄・前掲書 290頁
- (5) 中村雄二郎『共通感覚論』(岩波書店)1979年・参照。
私と同様のデカルト解釈を西垣通『マルチ・メディア』(岩波書店)1994年・もっており、その意味で本論に先がけているといえる。が、やはり小林に関する言及はない。
- (6) *数学と文化の歴史に関しては、志賀弘典『数学の領域』(日本評論社)を参照。
ポアンカレについては、野口悠紀雄『「超」整理法』(中央公論社)1993年 188頁を参照。
- (7) 小林章夫『ロンドンのコーヒー・ハウス』(初版・1984年『コーヒー・ハウス—18世紀イギリスの生活史』駸々堂)P H P研究所1994年 179頁
- (8) Eagleton,T 1984 The Function of Criticism 大橋洋一訳『批評の機能』1988年

- (9) Habermas, J 1962 *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Luchterhand 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』(未来社)1973年 53頁
- (10) Eagleton 前掲書 46-49頁
- (11) Eagleton 前掲書 99頁～
- (12) 近代を均質化の過程として捉えた思想家として、カール・シュミット、ハンナ・アレントがあげられる。(ただし、アレントの用語では「画一主義」conformism。)
- また、近代を効率化の過程として捉えた者として今田高俊をあげておく。(ただし、今田の用語では効率化ではなく「機能化」。)
- 近代に関して様々な捉え方があるが、私はこの二つを妥当とした。
- (13) 阿部孝太郎「情報環境論——疑似環境と文化・社会」(東京大学大学院修士論文)1991年
- (14) 具体的には、東大病院医師による少女への覚醒剤譲渡(1993年)、筑波の医師による「母子殺害事件」(1994年)、朝日新聞記者による女子中学生との売春騒動(1995年)、東大の現役女子学生による恐喝未遂事件(1995年)等があげられる。
- (15) Ortega *La Rebelion de las Masas* .1930年 寺田和夫訳『大衆の反逆』(高橋徹編『世界の名著68』)(中央公論社)1979年 390頁
- (16) Ortega 前掲書 472-473頁
- (17) 私がこのように考える根拠として、人工知能の問題がある。つまり、人工知能は形式論理的な計算、専門知識に関してはかなりの達成度を見せているが、常識(common sense)の問題ではほとんどいきづまっている(たとえば、戸田正直『心を持った機械』ダイヤモンド社・1987年、など参照)。このように、人工知能とのアナロジーで考えると、専門人の問題もそれがどういうものか見えてくるのではないか。
- (18) 現在の日本における専門人の考察として、次のものが役に立つ。

学者に関しては、西部邁『学者、この喜

劇的なる者』(草思社)、産経新聞社社会部編『大学を問う』(新潮社)、官僚に関しては、宮本政於『お役所の掟』(講談社)、科学者に関しては『研究する人生』(宝島社)、プログラマーに関しては野田正彰『コンピュータ新人類の研究』(文芸春秋)などである。

ただ、これらを興味本位の暴露本のような形ですますのではなく、社会全体においてそれらがどういった意味を持つかを問うことが重要である。上記の著作群はそのためのいい材料である。また、いわゆる「学歴エリート」たちがいかにしてオウム真理教に走ったか、質のいいルポルタージュが揃えばそれらも参考になるだろう。

- (19) この概念は、近代こそが家父長制(マッチョイズム)を強化した、という上野千鶴子『家父長制と資本制』(岩波書店)の指摘からヒントを得た。
- (20) 中島梓 『コミュニケーション不全症候群』(筑摩書房)1991年 85頁
- (21) 朝日新聞1994.11.26、同1995.12.20など
- (22) 木村敏『異常の構造』(講談社)1973年
- (23) 中島梓 『コミュニケーション不全症候群』(筑摩書房)1991年 50頁
- (24) 1995.7.15 テレビ朝日「フューチャー・メディア・ライブ'95」でのインタビューより)
- (25) Reish, R *The Work of Nations* 中谷巖訳『ザ・ワーク・オブ・ネーションズ』(ダイヤモンド社)参照
- (26) 阿部孝太郎 「セミオクラートの誕生——世紀末消費社会のゆくえ」電通総研「By-LINE」2-12 1993年
- (27) Huizinga *Homo Ludens* 1938年 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』(中央公論社)1963年 264頁
- (28) 学者の公共的な役割に関しては、Habermas・前掲書・135-146頁を参照。

*文化科学研究所、客員研究員